

上代における「ダニモ」の「モ」

小池 俊希

一 はじめに

副助詞ダニに助詞モを後接させた「ダニモ」という表現は、古くは上代より確認される。ただし、つとに富士谷成章によつて、「おほよそ、「だにも」とよむは、ただ「だに」と言ふに変はらず」(『あゆひ抄新注』二四四頁)と指摘されたように、現代に至るまで、「ダニモ」と「ダニ」は、ほとんど同じ表現と解されてきており⁽¹⁾、両者に差異を見出す研究は極めて少ない⁽²⁾。

- (1) a 朝みでに來鳴くかほ鳥汝だにも君に恋ふれや〔汝谷文君丹恋人〕時終へず鳴く (万葉十・一八二三)
- b 言繁み君は來まさずほととぎす汝だに來鳴け〔汝太爾來鳴〕朝戸開かむ (万葉八・一四九九)
- c ……葛飾の 真間の手児名が 麻衣に 青衿着け
ひたさ麻を 裳には織り着て 髪だにも 搔きは
梳らず〔髮谷母 搔者不梳〕 脊をだに はかず行

けれども「履平谷 不著雖行」錦綾の 中に包める
斎ひ兒も 妹に及かめや…… (万葉九・一八〇七)

上代における「ダニ」の意味は、一般に「すべてを譲った最小限のものや状態を指示し、それ以外を暗示する」(『時代別』四三三頁) こととされる。「ダニモ」がこれと似たはたらきを担っていると解釈できることは、(1a・b)や(1c)より明らかであろう。このように、最小限望ましい事態を提示することで、より望ましい事態をも含意する用法を、本稿では〈最小限度〉と称することとする。

なお、「ダニ」のみならず、単独の「モ」にもまた、〈最小限度〉の用法は確認される。

- (2) a 家に行きて何を語らむあしひきの山ほととぎす〔声も鳴け〕〔音毛奈家〕 (万葉十九・四二〇三)
- b 薦枕相まきし兒もあらばこそ〔児毛在者社〕夜の更
くらくも我が惜しませめ (万葉七・一四一四)
- つまり、「ダニモ」が〈最小限度〉にはたらくという理解

は、「ダニ」の〈最小限度〉のはたらきと、「モ」の〈最小限度〉のはたらきとが重なった結果、ひとつの〈最小限度〉として機能しているということになる。

しかしながら、「ダニ」以外の副助詞と「モ」の組み合わせでは、副助詞と助詞モとがそれぞれ別のはたらきを担う。一例を挙げると、「ノミモ」には、「ノミ」の〈限定〉のはたらきと、「モ」の〈最小限度〉のはたらきをそれぞれ看取できる。

(3) a 近くあれば名のみも聞きて慰めつ「名耳毛聞而名種目津」今夜ゆ恋のいや増さりなむ

(万葉十二・三二三五)

b ……葛飾の 真間の手児名が 奥つきを ここと

は聞けど 真木の葉や 茂りたるらむ 松が根や
遠く久しき 言のみも 名のみも我は 忘らゆま

しじ「言耳毛 名耳母吾者 不可忘」

(万葉三・四三二)

「名のみも聞きて慰めつ」(3a)であれば、「(声ヲ聞イタリ姿ヲ見タリハセズトモ) 噂だけ、を聞いて気を紛らわせた」という「ノミ」の〈限定〉のはたらきと、「(声ヲ聞イタリ姿ヲ見タリシタイガ) せめて、もと、噂を聞いて気を紛らわせた」という望ましきの最小限を提示する「モ」の〈最小限度〉のはたらきとが、それぞれ別に機能している(3)。この理解は、やや例外的な承接ではあるものの、「目のみだに、我に見

えこそ」(万葉七・一二二一)という、「ノミ+ダニ」の承接が可能であったことから支持されよう。

以上をふまえると、従来「ダニ」に等しいと考えられてきた「ダニモ」に關しても、「ダニ」と「モ」とに分けて別々のはたらきを想定できるのではないかという疑問が生じる。結論を先に述べると、「ダニモ」の述部に希望表現などの類型が現れる環境においては、「ダニ」に後接する「モ」に〈詠嘆〉のはたらきを認めることができる。ただし、その環境はあくまで限定的なものであり、上代における「ダニモ」の「モ」のすべてには〈詠嘆〉のはたらきを見出せず、「ダニモ」全体で〈最小限度〉を表すとしか解せない用例も少なくない。つまり、「ダニモ」にとつて上代は、〈最小限度+詠嘆〉から〈最小限度〉への過渡期にあたると推される。本稿では、「ダニ」に後接する「モ」の機能について問いつすが、過渡期である上代から遡つて觀察することは叶わないため、まず上代を対象として、特定の環境下では〈詠嘆〉性の残滓が認められることを指摘する。そして、如何にして〈最小限度+詠嘆〉から〈最小限度〉への変化が生じたのかを検討し、中古以降の状況を参照しつつ、「ダニ」と「モ」とが熟合した要因を明らかにする。

二 「ダニモ」の〈詠嘆〉性

二・一 「ダニモ」を承ける述部の整理

「ダニモ」の〈詠嘆〉性を検討するにあたり、まず「ダニ」の性質について確認する。

(4) a 天の川い向かひ立ちて恋しらに言だに告げむ「事

谷将告」妻問ふまでは (万葉十・二〇一一)

b いっしかと待つらむ妹に玉梓の言だに告げず「事

太尔不告」去にし君かも (万葉三・四四五)

c わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを
見たまひて、手づからこの赤花を描きつけにほは
してみたまふに、かくよき顔だに、さてまじれら

むは見苦しかるべかりけり (源氏・末摘花)

「ダニ」の基本的な意味は、(4 a) のような「セメテ：
ダケデモ」という〈最小限度〉に理解される。ただし、
(4 b) のように否定表現と共起すると、「……サエ」と口
語訳され、また、中古以降には、(4 c) のように否定表現
と共起せずに〈極限〉となる例が現れる。このような展開に
対する説明が近年は争点となっているが、「ダニ」の意味を
記述する際には、述部の類型という観点を以て、用例を整理
することが多い(4)。

述部の類型による分類という手法は、助詞モの研究にお

いても有効であると考えられるため⁽⁵⁾、本稿もこの手法に
倣って「ダニモ」について考察する。上代の「ダニ」につい
て、「モ」が後接しない例と、後接する例とに分けたのち、
それぞれを承ける述部の類型を整理した結果を表1に示す
(6) (7)。なお、「心をだにか相思はずあらむ」(記・六〇) な
ど、ひとつの類型に決めがたい用例については、「疑問・反
語」と「否定」、「意志・推量」のように複数の類型にそれぞ
れ計入し、用例数の合計とは別に、各類型の用例数の合計を
別途「計(延べ)」に示した。

表1 ダニ(モ)と述部の類型

		ダニ	ダニモ
希望	ナ	—	2
	ナモ	—	1
	モガモ	—	1
	コソ	7	—
	ネ	1	—
命令	命令形	8	2
禁止	ナ……ソ	—	1
意志 推量	ム	16	6
	ラム	1	—
	ベシ	2	1
	マシ	—	2
否定	ズ	21	7
	ナシ	1	1
	カヌ	—	1
疑問	カ(モ)	3	—
反語	ヤ	4	4
仮定条件	バ	8	3
その他		2	4
用例数		61	31
計(延べ)		74	38

表1より、「ダニ」と「ダニモ」との使い分けは、上代時
点で必ずしも明確でないことがわかる。これは、すでに「ダ
ニモ」の意味変化がはじまっていたことを示唆している。

ただし、希望表現と命令表現に関しては、比較的「ダニ」と「ダニモ」との差を看取しうる。すなわち、希望表現では、「ナモ」・「モガモ」などが「ダニモ」と結びつき、「コソ」・「ネ」が「ダニ」と結びついていることがわかる。また、命令表現についても、「ダニモ」の二例のうち一例には本文の問題が存しており⁽⁸⁾、「ダニ」に偏る傾向が認められる。そこで次節では、まず希望表現と共起する「ダニ」と「モ」について検討し、「ダニモ」の「モ」に〈詠嘆〉性が看取できることを確認する。

二・二 希望表現と共起する「ダニ」と「モ」

希望表現と共起する助詞モのはたらきは一般に〈最小限度〉とされてきたが、小池(二〇二三)にて指摘したように、〈最小限度〉にはたらくのは実現可能性の高い希望表現と共起するときにかぎられる。その一方で、実現可能性の低い事態を提示する希望表現と共起する助詞モは、〈詠嘆〉や〈感動〉の用法由来で欠如感や不満感を表出するようにはたらく。

(5) a 玉津島磯の浦廻の砂にもほひて行かな「真名子
仁文尔保比豆去名」妹も触れけむ

(万葉九・一七九九)

b 我が命も常にあらぬか「吾命毛常有奴可」昔見し象
の小川を行きて見むため

(万葉三・三三二)

つまり、(5a)は、「デキルトナラバ、亡妻ニ直接触レタイガ」せめて妻が触れたであろう砂に触れたい」と助詞モが〈最小限度〉にはたらくのに対して、(5b)の「命が永遠にあること」は、「象の小川を見ること」に対して明らかに過分な願いである。後者の助詞モは〈最小限度〉と解せず、実現しがたい望みへの〈詠嘆〉の表出にはたらいっていると見るべきであろう。

また、〈最小限度〉の用法を持つ「ダニ」については、そもそも実現可能性の低い事態を提示する希望表現には伴われないが、「ダニモ」という形で、〈最小限度+詠嘆〉となることがある。

(6) a 三輪山を然も隠すか雲だにも心あらなも「雲谷裳

情有南畝」隠さふべしや

(万葉一・一八)

b 我が背子が見らむ佐保道の青柳を手折りてだにも
見むよしもがも「手折而谷裳見縁欲得」

(万葉八・一四三二)

(6a)の例は、「デキルトナラバ、慣レ親シンダ三輪山ノ見エル後飛鳥岡本宮カラ近江宮ヘト遷都ハシタクナイガ」せめて雲に慈悲があつて、今背後に見える三輪山を隠さないでほしい、(6b)の例もまた、「デキルトナラバ、直ニ見タイガ」せめて手折り贈られてきた形でも見たい」と解されることから、両者ともに最小限望ましい事態を提示する〈最小限度〉の意が認められる。ただし、そのように譲歩してもな

お、「雲に慈悲があつて三輪山を隠さぬように移動する」事態や、「地理的に隔たつた場所にいる坂上郎女が佐保邸の青柳を手折つた形で見る」という事態は成立しがたい。つまり、(6 a・b)に見られる〈最小限度〉の意は、あくまで「ダニ」のみが担つており、「モ」は実現しがたい事態への不満感や欠如感を表していると解するべきであらう。このように、「ダニモ」の意味が変化しつつある上代においても、実現可能性の低い事態を提示する希望表現と共起する「ダニモ」には、〈最小限度+詠嘆〉のはたらきを見出すことができる(9)。

ただし、「ダニモ」の本来的なはたらきが〈最小限度+詠嘆〉であつたとしても、〈最小限度〉のみの「ダニモ」が使用されつつあつたこともまた事実であり(注9参照)、やはり、上代は、「ダニモ」の意味変化の過渡期であつたことがうかがわれる。そこで、次章では、否定文と共起する「ダニモ」を糸口として、この意味変化の発生について考察してゆきたい。そのためにまず、副助詞と否定のスコープについて確認する。

三 「ダニ」と「モ」の熱合

三・一 副助詞と否定のスコープ

「ダニ」のスコープと否定のスコープに関して、衣畑(二〇〇五)ではつぎのような構造が提示される(10)。

(7) a ^[neg] 夢にだに^[p] 見え^[ず]

(衣畑(二〇〇五)・一六九頁)

b ^[p] 夢にだに^[neg] 見え^[ず]

(衣畑(二〇〇五)・同頁)

(7 a) が上代における「ダニ」の「述語の表す意味において実現可能性の高い要素を取り立てる」(衣畑(二〇〇五)・一六六頁)構造である。それが(7 b)のように再解釈されることで、〈極限〉などと称される、中古以降の「ダニ」の「述語の表す意味において実現可能性の低い要素を取り立てる」(衣畑(二〇〇五)・一六九頁)構造に変化したとされる。また、同様の観点は、現代日本語の「マデ」と「サエ」についても考察されている。

(8) a 親にまで打ち明けなかった。

解釈1…(誰にも言えない内容だったので)最も信頼できる「親」にも打ち明けなかった。

解釈2…(あまり問題を大きくしなかったたので)

信頼できる他の人(「友人」等)には打ち明けたが、「親」には打ち明けなかった。

(茂木(二九九九)・二九頁、傍線は原著者による)

b 親にさへ打ち明けなかった。

解釈1…最も信頼できる「親」にも打ち明けな

った。

解釈2…*信頼できる他の人(友人等)には打ち明けたが、「親」には打ち明けなかった。

(茂木(一九九九)・同頁、傍線は原著者による)

茂木(一九九九)は、副助詞のスコープが否定のスコープよりも広い「解釈1」を「scope」スコープ、対照的に、副助詞のスコープが否定のスコープよりも狭い「解釈2」を「Narrow」スコープとして、否定文において「マデ」と「サエ」とを自由に交換できない現象に説明を与えた。

(8 a) を、衣畑(二〇〇五)と同様に記述すれば、つぎのようになる。

(9) 解釈1…「scope」親にまで「scope」打ち明け「scope」なかった」

解釈2…「Narrow」親にまで「Narrow」打ち明け「Narrow」なかった」

以上のような、副助詞と否定のスコープの先行論をふまえて、上代の助詞モと否定のスコープに立ち返りたい。

(10) a 今更に寝めや我が背子新た夜の全夜も落ちず「全夜も落ちず」夢に見えこそ (万葉十二・三二二〇)

b 我が心ともしみ思ふ新た夜の「一夜も落ちず」「一夜も落ちず」夢に見えこそ (万葉十二・二八四二)

(10 a・b) は、「全夜」と「一夜」という一見すると対照的な語を承けながら、いずれも「……も落ちず」という句を以て、結果としてどちらも「毎晩欠かすことなく」という解釈を導く。このような解釈が可能であるのは、現代語の

「マデ」と否定表現に二種のスコープが存していたのと同様に、上代語の助詞モと否定表現においても、(11 a・b) のような二種のスコープが想定できるためであろう。

(11) a 「scope」scope 全夜も「scope」scope 落ち「scope」scope」

b 「Narrow」Narrow 一夜も「Narrow」Narrow 落ち「Narrow」Narrow」

次節では、この事実を用いて、否定表現と共起する「ダニモ」における、〈最小限度+詠嘆〉から〈最小限度〉への変化の発生を推定する。

3・2 否定表現と共起する「ダニ」と「モ」

以上をふまえて、否定表現と共起する「ダニモ」における意味変化を捉えてゆく。

(12) a 切目山行きかふ道の朝霞ほのかにだにや妹に逢はざらむ「scope」scope 髣髴谷八妹尔不相牟」(万葉十二・三〇三七)

b 言清くいたくもな言ひそ一日だに君いしなくは「scope」scope 日太尔君伊之哭者」塙へ難きかも (万葉四・五三七)

c 夢にだに見ざりしものを「scope」scope 夢尔谷不見在之物乎」おほほしく宮出もするか佐日の隈廻を (万葉二・一七五)

まず、否定表現と共起する「ダニ」は、衣畑(二〇〇五)の指摘するとおり、「scope」scope 夢にだに「scope」scope 見え「scope」scope」(7 a)

という構造をとる。したがって、「ダニ」が影響を及ぼすのは否定を除いた部分に限定され、「ダニ」の前後部には、希望表現や命令表現と同様に、実現可能性の高い要素をとる。「夢に見える」という事態であれば、「現に逢う」という事態に比して、実現可能性は高く望ましさは最小限の事態であるため、否定表現と共起する「ダニ」も〈最小限度〉のはたらしきを有していることがわかる。

また、否定表現と共起する「ダニモ」についても、基本的には「ダニ」と同じく、〈最小限度〉にはたらくように見える。

- (13) a 大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす 慕ひ来まして 息だにも いまだ休めず
[伊企随尔母 伊摩随夜周米受] 年月も いまだあらねば 心ゆも 思はぬ間に うちなびき臥やしぬれ……
(万葉五・七九四)

b ……うつせみと 思ひし妹が 玉かざる ほかの
にだにも 見えなく思へば[髣髴谷裳 不見思者]

(万葉二・二一〇)

ただし、「ほのかにだにも見えなく思へば」(13 b)については、「かすかに見える」という望ましさの最小限を提示しつつ、そのように譲歩してもなお、「亡妻の姿が見える」という事態は実現しがたい。したがって、否定表現と共起する「ダニモ」の一部の用例に関しては、〈最小限度+詠嘆〉と

いう解釈が成り立ちうる。

ところで、実現可能性の低い事態が提示される際には、「我が命も常にあらぬか」(5 b)や「全夜も落ちず」(10 a)のように、しばしば極限的な表現が伴われる。このような環境において、助詞モは〈詠嘆〉の用法から、〈極限〉の用法へと展開したものと思われる(11)。

ここで注意が必要なのは、前節に確認したように、助詞モと否定表現には二種のスコープが存する点である。(11 a・b)を(14 a・b)として再掲する。

- (14) a [全夜も] [落ち]ず
b [一夜も] [落ち]ず

〈詠嘆〉の用法から〈極限〉の用法へと展開した助詞モは、(14 a)の構造をとる。しかしながら、助詞モは(14 a)と(14 b)との両方の構造をとりえたため、「ダニモ」の形では、(14 b)の構造をとる上代の「ダニ」にひきずられて、助詞モが(14 b)の構造をとるようになったものと推される。その結果、〈最小限度+詠嘆〉から〈最小限度〉へという変化が生じたのであろう。

三・三 命令表現と共起する「ダニ」と「モ」

つぎに、命令表現と共起する「ダニ」が「モ」を伴いたい理由について検討する。まず、命令表現と共起する「ダ

二」の例を示す。

(15) a 明日よりは恋ひつつも行かむ今夜だに早く宵より
細解け我妹[今夕弾速初夜從綏解我妹]

(万葉十二・三一一九)

b 石上布留の早稲田を秀ですとも綯だに延へよ[綯

谷延与]守りつつ居らむ (万葉七・一三五三)

c 現には逢ふよしもなし夢にだに間なく見え君[夢

谷間無見君]恋に死ぬべし (万葉十一・二五四四)

(15) a は、「(デキルコトナラバ、旅ニ出ル明日以降モ逢イ

タイガ) せめて今夜だけでも共寝しよう」と、望ましさを最小限の事態を提示する〈最小限度〉にはたらいっている。そのほかの例についても、命令表現に共起する「ダニ」は、いずれも〈最小限度〉と解することができる。

命令表現と共起する助詞モに目を移すと、「ダニ」と同様に、望ましさを最低限を提示する〈最小限度〉の例が認められる。

(16) a 家に行きて何を語らむあしひきの山ほととぎす一

声も鳴け[二音毛奈家] (万葉十九・四二〇三)

b 風吹きて川波立ちぬ引き舟に渡りも来ませ[引船

丹度裳来]夜の更けぬ間に (万葉十・二〇五四)

(16 a) は(2 a)の再掲である。また、(16 b)にも、「漕ぎ舟ハ難シクテモ」せめて人が綱で引く舟で渡っていらつしやい」と、望ましさは低くとも実現可能性の高い事態を

提示するはたらきが看取される(12)。

ただし、命令表現と共起する助詞モには、〈最小限度〉とは対照的に、望ましさを高い事態を提示する〈極限〉の例も散見される(13)。

(17) a ……何時はしも 恋ひぬ時とは あらねどもこ

の九月を 我が背子が 偲ひにせよと 千代にも

偲ひ渡れと[千世尔物 偲渡登] 万代に 語り継

がへと 始めてし この九月の 過ぎまくを い

たもすべなみ…… (万葉十三・三三二九)

b 川の上のいつ藻の花のいつもいつも来ませ我が背

子[何時と来益我背子]時じけめやも (万葉四・四九二)

(万葉四・四九二)

c 春山の友うぐひすの鳴き別れ帰ります間も思ほせ

我を[春益間思御吾] (万葉十・一八九〇)

d 天地の神も助けよ[天地之神毛助与]草枕旅行く君

が家に至るまで (万葉四・五四九)

(16 a・b) が最低限望ましい事態を提示しているのに

対して、「千代にも偲ひ渡れ」(17 a)や「いつもいつも来ませ」(17 b)などは、望ましさのかなり高い事態を提示して、それよりも低い事態を含意する〈極限〉の用法と解される。

なお、「天地の神も助けよ」(17 d)ともなると、望ましさの尺度などはそれほど意識されず、〈極限〉というよりは、実現されがたい事態への嘆きの表出という〈詠嘆〉に与ってい

るようにも思われる。

以上を小括する。まず、命令表現と共起する「ダニ」は、いずれの例も望ましきの最低限を示す〈最小限度〉にはたらく。その一方で、「モ」は〈最小限度〉にも、それとは反対に望ましきの高い事態を示す〈極限〉にもはたらく。〈極限〉は〈詠嘆〉に通じる用法であるため、命令文内で「ダニ」に「モ」が後接したときには、無条件に〈最小限度〉とは解されず、〈最小限度＋詠嘆〉と解される余地が残されていたものと思われる。したがって、後述する意志・推量表現との共起とは異なり、意味変化を経たのちの〈最小限度〉のみのはたらきを有する「ダニモ」の受容に抵抗があったのではなからうか。

三・四 意志・推量表現と共起する「ダニ」と「モ」

ここまで検討した希望表現と命令表現は、「ダニモ」の意味変化の過渡期である上代においてもなお、「ダニ」と「ダニモ」との使い分けを見出しうる類型であった。それでは、「ダニ」と「ダニモ」に使い分けを見出しがたい類型については、如何に考えるべきであろうか。本節では、そのような類型の最たる例として、意志・推量表現と共起する「ダニモ」を取り上げる。

(18) a 天の川い向かひ立ちて恋しらに言だに告げむ「事

谷将告」妻問ふまでは (万葉十・二〇一一)

b 池の辺の小槻が下の篠な刈りそねそれをだに君が形見に見つつ偲はむ「其谷公形見尔監作将偲」

(万葉七・一二七六)

(18 a・b) に示したように、意志・推量表現と共起する「ダニ」もまた、ほかの類型と同様に〈最小限度〉にはたらく。

上代において意志・推量表現と共起する助詞モについても、〈最小限度〉にはたらくことが知られているが⁽¹⁴⁾、命令表現などと共起する場合とは異なり、〈極端〉の用法はあまり認められない。

(19) a 一瀬には千度障らひ行く水の後にも逢はむ「後毛将相」今にあらずとも (万葉四・六九九)

b 忘れ草おふる野辺とは見るらめどこはしのぶなり
のちも頼まむ (伊勢・一〇〇段)

『万葉集』における「後にも逢はむ」(19 a) は、「今も、後も逢おう」とは解しがたく、「今スグハ難シケレドモ」せめて後には逢おう」と〈最小限度〉に解される。なお、中古に至ると、(19 b) のような文型であっても、「今モオ忘れハシテイナイシ」今後もお頼りいたしましょう」のように、〈最小限度〉ではなく、〈並列〉や〈含蓄〉に解釈される。

意志・推量表現と共起する助詞モが〈最小限度〉にはたらくやさしいということは、助詞モに前接する語に着目すること

によつても知ることができる。上代においては、極小の程度を表す副詞と極大の程度を表す副詞とがいずれも助詞モに接続するが⁽¹⁵⁾、助詞モが意志・推量文中に用いられる場合は、もつぱら極小の程度を表す副詞を伴う⁽¹⁶⁾。

(20) a 秋風の寒きこのころ下に着む妹が形見とかつも偲

はむ「可都毛思努播武」 (万葉八・一六二六)

b 常かくし恋ふれば苦ししましくも心休めむ「暫毛

心安目六」事計りせよ (万葉十二・二九〇八)

c 人こそば凡にも言はめ「意保尔毛言目」我がこくだ

しのふ川原を標結ふなゆめ (万葉七・二二五二)

以上をふまえると、意志・推量表現と共起する助詞モは、〈最小限度〉に解されやすいため、「ダニ」に後接して「ダニモ」の形となった場合にも、〈最小限度＋詠嘆〉と解されがたかったものと考えられる。換言すると、意志・推量文は「ダニモ」が〈最小限度〉に解されやすい環境であつたと考えられる。それ故に、過渡期である上代において、比較的小く〈最小限度〉の「ダニモ」が受容されたのではなからうか。

三・五 「ダニ」と「モ」の熟合の背景

最後に、「ダニモ」という形が、ほかの「副助詞＋モ」や「副助詞＋係助詞」に比して、極めて強く熟合していたことを示し、その理由について検討する。

上代においては、約四割の「ダニ」が「モ」を伴うのに対して、つぎに「モ」を後接させやすい「ノミ」ですら、二一七例中「モ」を後接させる用例は九例に留まる⁽¹⁷⁾。また、副助詞に後接する助詞は「モ」だけではない。一例を挙げると、「ノミ＋係助詞」であれば、「ノミモ」のほかに、つぎの五通りが確認できる。

(21) a 住吉の粉浜のしじみ開けも見ず隠りてのみや「隠

耳哉」恋ひ渡りなむ (万葉六・九九七)

b いづくには鳴きもしにけむほととぎす我家の里に

今日のみそ鳴く「今日耳曾鳴」(万葉八・一四八八)

c 直に逢ひて見てばのみこそ「見而者耳杜」たまきは

る命に向かふ我が恋止まめ (万葉四・六七八)

d 世の中は常かくのみか「常如是耳加」結びてし白玉

の緒の絶ゆらく思へば (万葉七・一三二二)

e ……この山を うしはく神の 昔より 禁めぬ行

事ぞ 今日のみは「今日耳者」めぐしもな見そ

事も咎むな (万葉九・一七五九)

冒頭に、「ノミモ」には「ノミ」の〈限定〉と「モ」の〈最小限度〉との両方のはたらきが認められると指摘したが、これはほかの「副助詞＋係助詞」の承接についても同様である。「隠りてのみや」(21a)であれば、「恋心を包み隠したままにいる」という〈限定〉のはたらきと、「……や……ム」のいわゆる「不望予想」⁽¹⁸⁾のはたらきとが、それぞれ認

められよう。

ただし、上代における「副助詞＋係助詞」の用例数に着目すると、「ダニモ」について用例数の多い「ノミヤ」であっても、「ノミ」二七例に対して、「ノミヤ」は二二例に過ぎず、全体の一割を占めるほどの用例数に留まっている。つまり、「副助詞＋モ」という括りを、「副助詞＋係助詞」という括りに拡張してもなお、「ダニ」の用例に占める「ダニモ」という形の割合の大きさは突出しており、上代時点におけるこの二語の結びつきの強さがうかがわれる。

なお、そのような熟合の進展は、中古以降に「ダニ＋モ」が「ダモ（ダンモ）」という形で現れることからもうかがい知ることができる。

(22) a 阿育王の言（は）ク、是（れ）真（ま）こと

少欲なり。乃至一錢ダモ受（け）不（ず）とい

（ひ）き「阿育王言是真少欲乃至不受一錢」

（法華義疏長保四年点）

b 夢にだもあふとみるこそうれしけれのこりの頼す

くなければども （和泉式部集・五二七）

c 迷へる時は、目をひさぎて、我が身をだもみず、

悟れる時には、眼を開きて、人の体を見る。

（海道記）

以上のように、「副助詞＋係助詞」という承接のなかで、「ダニモ」のみに顕著な結びつきが認められることに對して

は、ふたつの要因が考えられる。ひとつは、「ダニモ」が〈最小限度〉を表すように意味を変化させたことであり、もうひとつは、和歌という音節数の制約される環境下で使用されたことである。

まず、前者の要因について検討する。そもそも、「ダニモ」が熟合する以前の〈最小限度＋詠嘆〉というはたらきが許容される環境はそれほど多くない。一例を挙げると、希望文においては、〈最小限度＋詠嘆〉の「ダニモ」の使用が許容されるには、実現不可能に近い事態でありつつも、それより実現しやすい事態を提示するという構造が必要になる。この構造は、「雲だにも心あらなも」（6a）のように想定不可能ではないものの、頻繁に使用されるとは考えがたい。同様にして「ノミモ」や「ノミヤ」なども、ふたつのはたらきが同時に成立するという環境は少なく、それ故に用例数も少量に留まるものと推される。しかしながら、上代の「ダニモ」は、〈最小限度＋詠嘆〉から〈最小限度〉へと意味を変化させつつあったため、その意味変化を経た「ダニモ」は、「ダニ」と同じ環境で使うことができた。したがって、複雑な使用条件を有するほかの「副助詞＋係助詞」に比して、使用条件の緩やかな「ダニモ」の用例数が増加したのであろう。

つぎに、後者の要因について検討する。「ダニモ」と「ダニ」がともに〈最小限度〉として等しくはたらくのであれば、和歌において音節数が不足した場合に、「ダニ」を「ダニモ」

で代替したということは十分に考えうる(19)。一例を挙げると、(23 a・b)では、三音節の「コヨヒ」には「ダニ」を後接させて、二音節の「ケフ」には「ダニモ」を後接させることで、いずれも五音句が形成されている。

(23) a タ占にも占にも告れる今夜だに「今夜谷」来まさぬ
君を何時と waited 君 (万葉十一・二六一三)

b ……鹿子じもの ただひとりして 朝戸出の か
なしき我が子 あらたまの 年の緒長く 相見ず
は 恋しくあるべし 今日だにも「今日太尔母」
言問ひせむと…… (万葉二十・四四〇八)

また、中古の用例に目を移しても、音節数の制限と「ダニモ」の使用率との間には相関が見出される。

(24) a 身は捨てつ心をだにもはふらさじつひにはいかか
なると知るべく (古今・一〇六四)

b 例の心入れて騒ぎたまはんを語らひ取りて、わが
思ひしやうに、やすからずとだにも思はせてま
つらん (源氏・蜻蛉)

中古においては、和歌のみならず、地の文や会話文にも「ダニモ」が用いられるが、その使用傾向には偏りがある。本稿の中古における調査対象資料には「ダニ」が一三一九例認められるが、そのうち「ダニモ」は九七例に過ぎない。ただし、用例を和歌にかぎると、「ダニ」四〇一例のうち「ダニモ」は七七例となり、「ダニモ」の使用が和歌に集中して

いる様相が看取できよう。

なお、中古の地の文や会話文で「ダニモ」の使用が少ない要因としては、「ダニ」の用法の拡張が考えられる。すなわち、「かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり」(4c)のような、〈極限〉の用法を獲得したことにより、「ダニモ」が無条件に〈最小限度〉と解される環境が失われ、結果として、「ダニモ」の用例数が減少したものと推される。

四 おわりに

本稿では、「ダニモ」という表現について、述部の類型による整理を施すことにより、そのはたらきを検討した。そして、一部の希望表現と共起する「ダニモ」には、〈最小限度＋詠嘆〉というはたらきが認められることを示した。さらに、副助詞と否定のスコープをふまえることにより、否定表現と共起する「ダニモ」において、〈最小限度＋詠嘆〉から〈最小限度〉への転換が生じたことを指摘した。

また、そのような転換が生じたのち、助詞モを〈詠嘆〉由来の〈極端〉に解することができる命令文内などの環境下では、意味が〈最小限度〉に変化した「ダニモ」が受容されがたく、対照的に、助詞モが〈最小限度〉に解される意志・推量文内などの環境下では、意味が〈最小限度〉に変化した

「ダニモ」が受容されやすいことを示した。

近・現代日本語の助詞モの中心は、「事情の類する他物と相合せて之を提示する」(松下(一九二八)・六〇〇頁)という「合説」の機能とされる。この機能は、上代日本語の助詞モにも当然ながら認められるが、その一方で、上代には「見れば悲しも」(万葉一・二九)のような〈詠嘆〉や〈感動〉などと解される用法もある。この両者を如何に結びつけるかという問題は、古代語の助詞モ研究におけるもっとも大きな問題のひとつであろう。本稿では、「ダニモ」という承接に注目することで、その問題に対して、〈詠嘆〉から〈極端〉、そして〈最小限度〉へというひとつの道筋を提示した。

〔用例出典〕

用例の有無にかかわらず、本稿で「上代」・「中古」として用例数を示した場合には、以下の資料を集計の対象とした。なお、用例の検索には、国立国語研究所(二〇二二)『日本語歴史コーパス』(Ver. 2022.10)を適宜使用した。

上代…『万葉集』(『新編日本古典文学全集』(小学館)による)、『古事記』歌謡・『日本書紀』歌謡・『続日本紀』歌謡・『風土記』歌謡・『仏足石歌』(以上『日本古典文学大系 古代歌謡集』(岩波書店)による)、『続日本紀』宣命(北川和秀「編」『続日本紀宣命 校本・総索引』(吉川弘文館)による)、『延喜式』祝詞(沖森卓也「編」『東京国立博物館蔵本 延喜式祝詞総索引』(汲古書院)による)

*『記紀』歌謡・『万葉集』中の重出歌、『日本書紀』の訓字表記の歌謡については、それぞれ用例として認めた。

*『万葉集』については、読添えの例も用例として認めた。

中古…『竹取物語』・『古今和歌集』・『伊勢物語』・『土佐日記』・『大和物語』・『平中物語』・『蜻蛉日記』・『落窪物語』・『枕草子』・『源氏物語』・『和泉式部日記』・『紫式部日記』・『堤中納言物語』・『更級日記』・『大鏡』・『讃岐典侍日記』(以上『新編日本古典文学全集』(小学館)による)、『後撰和歌集』・『拾遺和歌集』・『後拾遺和歌集』・『金葉和歌集』・『詞花和歌集』・『千載和歌集』(以上『十一代集(正保版本)』(国文学研究資料館蔵)による)

集計の対象外ではあるが、本文中に引用した資料につきに示す。

『法華義疏(長保四年点)』(中田祝夫『改訂版 古点本の国語学的研究 訳文篇』(勉誠社)による)、『和泉式部集』(『新編国歌大観』(角川書店)による)、『海道記』(『新編日本古典文学全集』(小学館)による)

〔参考文献〕

伊藤博ほか(一九八三)『万葉集全注』有斐閣
大野 晋(一九九三)『係り結びの研究』岩波書店
岡崎 正継(一九九六)『国語助詞論攷』おうふう
加納協三郎(一九三八)『だに』『すら』の用法上の差異に就て『国語と国文学』(二五・六、四九・六四頁)
衣畑 智秀(二〇〇五)「副助詞ダニの意味と構造とその変化―上

代・中古における』『日本語文法』(五・一)、一五八・一七五頁

(二〇一九)「上代日本語の否定極性表現―副助詞ダニの意味再考―」澤田治ほか『編』『極性表現の構造・意味・機能』開拓社、三五六・三七九頁

工藤美紗子(一九六三)『も』という助詞の意味『文学』(三一・一二)、九八・一〇四頁

小池 俊希(二〇二二)「意志・推量の助動詞と助詞その共起―上代・中古における用例整理―」『日本語学論集』(二八)、一・一六頁

(二〇二三)「上代における希望表現と助詞その共起」『万葉』(二三五)、掲載予定

此島 正年(一九七三)『国語助詞の研究 助詞史素描』(増訂版)桜楓社

小柳 智一(二〇一五)「副助詞の形―『だに』『さへ』『すら』の場合―」国語学叢史研究会『編』『国語学叢史の研究』(三四) 和泉書院、三七・五四頁

(二〇一九)「日本語のとりたて表現の歴史」野田尚史『編』『日本語と世界の言語のとりたて表現』くろしお出版、四一・五八頁

上代語辞典編修委員会『編』(一九六七)『時代別国語大辞典 上代編』三省堂

鈴木ひとみ(二〇〇五)「副助詞サエ(サへ)の用法とその変遷―ダ

二との関連において―」『日本語学論集』(二)、三三・五四頁

田中 敏生(二〇一四)『万葉集』の副助詞ダニ―上代における(相対的軽少性)の意義の確認―『四国大学紀要 人文・社会科学編』(四二)、一三五・一六一頁

鶴 久(一九七〇)「係助詞だに・すら・さへ(さえ)(しか)(でも)」『国文学解釈と鑑賞』(三二五・一三)、九〇・九七頁

中田祝夫・竹岡正夫(一九六〇)『あゆみ抄新注』風間書房

野村 剛史(二〇〇一)「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』(七〇・一)、一・三四頁

松下大三郎(一九二八)『改撰標準日本文法』紀元社

松村明『編』(一九六九)『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学燈社

向井 克年(二〇一二)「万葉集における副助詞『だに』の意味変化―『すら』との相補的な関係から―」『福岡大学 日本語日本文学』(二二)、一・一三頁

茂木 俊伸(一九九九)「とりたて詞『まで』『さえ』について―否定との関わりから―」『日本語と日本文学』(二八)、二七・三六頁

森野 崇(一九九八)「奈良時代の係助詞『も』に関する考察」『二松学舎大学論集』(四二)、四七・六九頁

山口明穂・秋本守英『編』(二〇〇一)『日本語文法大辞典』明治書院

吉田 茂晃(一九九〇)「万葉集における助詞『も』の文中用法」『島

大國文』(一九)、一五・二三頁

〔注〕

(1) 一般に「ダニモは係助詞モがついているだけダニをいつそう強調しており、奈良時代よりダニと平行して用いられている」(鶴(一)九七〇)・一九一頁、傍線は原著者による)のように理解されており、小柳(二〇一九)ではやや詳しく「複数的な『も』と『反限定』『極端』『反極端』『類似』、単数的な『は』と『限定』は、意味が親和的であり、そのために承接しやすいと考えられる。そして、副助詞に後接した『も』『は』は、前にある副助詞の意味をより明確にする役割を果たしている」(五二頁)と述べられる。同種の指摘としては、『日本語文法大辞典』の「だにも」(野村剛史氏執筆)が「『も』は基準となる事態から見れば、事態の成立する対象の範囲を拡大する働きを持つから、『だに』の最低限を表す働きをより強調する」(四四九頁)とするほか、『古典語現代語 助詞助動詞詳説』の「だに—副助詞(『古典語』)(長谷川清喜氏執筆)も、「ダニ」の意味を期待・希望の最低線としたうえで、『だに』が『だにも』の形で現われることの多いその『も』も、この控えめの現われとみうる」(五三七頁、圏点は原著者による)とする。

(2) 此島(一九七三)が『だに』が『も』に比べて、それに包まれる故に陳述性が弱いということは言えるわけである」(二三三頁)と指摘したほか、森野(一九九八)も『だに』と似てはいても、この用法の『も』が『だに』と全く同じ機能をもっているわけではない。(中略)相互承接が常に『だにも』になる点などから判断して、その大きな違いは、やはり『も』の方が表現主体の主観の直接的な表現、

即ち主体的表現としてはたらく点に求められるであろう」(六六頁)と述べる。ただし、いずれも承接の順序を意味の差異の根拠としており、実際にどのような差異が認められるのかについては詳らかでない。

(3) 森野(一九九八)も、「現代語ならばまず考えにくい『のみも』という承接が可能だったのは、この『も』が〔含蓄〕ではなく、『のみ』によって限定の加えられた対象を『……だけでも』の意で譲歩的にとりたてているからだと分析できる」(六七頁)とする。なお、「ノミモ」の九例のうち、三組六例は「音(言)のみも名のみも」という形であるため、これらの例における「モ」のはたらくきは、(最小限度)でなく(並列)とも解しうる。

(4) 述部の類型の制限については、つとに加納(一九三八)によって、『万葉集』中の「ダニ」を承ける述部が、「意志」・「命令」・「願望」・「欲求」・「疑問」・「否定」・「条件句」のいずれかであることが指摘された。この観点による分類に倣う研究は、『古典語現代語 助詞助動詞詳説』の「だに—副助詞(『古典語』)(長谷川清喜氏執筆)をはじめとして、鈴木(二〇〇五)や田中(二〇一四)、衣畑(二〇一九)など、枚挙にいとまがない。

(5) 助詞モを述部の類型から分類した研究としては、工藤(一九六三)や吉田(一九九〇)、森野(一九九八)などが挙げられる。

(6) 表1に「その他」とした用例には、述部が省略された例(今だにも「吾子よ今だにも」吾子よ(紀・一〇〇)や、歌意より述部に「ム」などが補填できる例(「妻に言だにも告げにぞ来つる」(万葉十・二〇〇六))、そして、述部に「トモシ」をとる例(「風をだに恋ふるはと

もし」(万葉四・四八九)など)がある。なお、述部に「トモシ」をとる例については、岡崎(一九九六)や衣畑(二〇一九)によって、《最小限度》から解釈可能であると指摘されている。

(7) 「かくだにも」我は祈ひなむ」(万葉三・三七九)など、「カクダニモ」という形は、「これほどまでに」くらいの意に解され、「ダニ」のなかでは例外的な用法とされる(岡崎(一九九六)・衣畑(二〇一九)など)。「カクダニモ」が例外的となる原因については、向井(二〇一二)や小柳(二〇一五)の論考があるが、いずれにせよほかの用例とは別に扱うべきと考え、計五例を表1の集計から除いている。

(8) 「日だにも逢はせ」日谷毛相為」(万葉十一・二七六〇)は、旧訓「ヒダニモアハム」で、新点本には「日谷毛相将」とある。現行のテキストの「為」字は、次点本系統の本文による。

(9) ただし、「ナ」は実現可能性の高い事態を提示する希望表現であり、共起する「ダニモ」の「モ」に《詠嘆》性を認めたい。二例ともに「今だにも……行かな」の形であり、「ダニ」と「モ」との熟合が進んだのちに、音節数の制約などから、「ダニモ」の形が選択されたものと思われる。

(10) [NEB] が否定のスコープ、[EP] が「ダニ」のスコープ(焦点句)、[S] が動詞句を表す。

(11) 森野(一九九八)においては、意味的な観点より、《詠嘆》から極端な程度を表す《意外》、そして《最低・最小限度のとりたて》という順の派生が想定される。これは、実現しがたい事態に対する不満感や嘆きといった情意を表出する《詠嘆》から《極限》の用法が派

生し、さらに、助詞モと否定のスコープの関係から《最小限度》へと展開するとした本稿の想定と軌を一にしていよう。

(12) なお、「我妹子が下にも着よと贈りたる衣の紐を我解かめやも」(万葉十五・三五八五)を、「せめて下着に着てください」(『全注』(十五)(吉井巖氏執筆)・三八頁)のように、《最小限度》と解する立場もある。ただし、直前の「下にを着ませ」(万葉十五・三五八四)からは《詠嘆》性が看取されるほか、「白たへの我が下衣失はず持てれ我が背子」(万葉十五・三七五一)や「下紐に結び付け持ちて止まらず偲はせ」(万葉十五・三七六六)など、当時の文化的背景からも、むしろ「下に着る」ことが望まれていると見るべきであろう。

(13) 「人妻に我も交はらむ我が妻に人も言問へ」(万葉九・一七五九)など、望ましきや実現可能性の尺度を持たない、単なる《並列》や《含蓄》の例も存する。

(14) 大野(一九九三)や森野(一九九八)などで指摘されたほか、小池(二〇二二)においても、意志・推量文中の助詞モの中心的用法が、上代から中古にかけて《最小限度》から《並列》・《含蓄》へと移行したことを指摘した。

(15) たとえば、否定表現であれば、「しばしばも降らぬ雪ぞ」(万葉十九・四二二七)、「しましくも止む時もなく」(万葉十二・二九二一)のように、助詞モが両者を承ける。なお、本稿はあくまで副詞にかぎって検討しているが、吉田(一九九〇)では、「量・程度表現」という類型内で、数量詞や追加量をも含めて、助詞モに前接する要素が検討されている。

(16) 強いて、極大を表す副詞が前接する例を挙げると、「つばらに

も見つつ行かむをしばしばも見放けむ山を」(万葉一・一七)くらいであるが、いずれの例も接続助詞ヲを伴って逆接句を形成している。

逆接句には、「来むと言ふも来ぬ時あるを」(万葉四・五二七)のように、しばしば助詞モが用いられるため、右の例も、逆接句の類型に含めて考えるべき用例であるように思われる。

(17) 上代において「モ」に前接可能な副助詞は、「ダニ」・「ノミ」・「スラ」・「サヘ」・「マデ」の五種であるが、「ダニ」が九七例中三六例「モ」を伴うのに対して(「カクダニモ」を含む)、「ノミ」は二一七例中九例であり、「スラ」・「サヘ」・「マデ」に至っては、それぞれ三〇例中二例、六七例中一例、二〇六例中二例に留まる。なお、「シ」を副助詞と見れば、「シモ」も「副助詞+モ」の例に加えることができるが、本稿では対象から除いている。

(18) 「不望予想」は、野村(二〇〇一)による「ヤ」の用法のひとつであり、「実現可能性の高いしかし望まざる事態」(二三頁)に対する「否定的な意志」(同頁)を述べる用法とされる。

(19) 本稿における調査対象資料のうち、『続日本紀』宣命と『延喜式』祝詞には「ダニ」の用例が存さないため、上代の「ダニ」の用例はすべて和歌によるものである。

〔付記〕

本稿は、JSPS 科研費 JP21J20336 の助成を受けたものである。

(こいけ としき 大学院人文社会系研究科 博士課程二年・

日本学術振興会特別研究員)